

## 神戸芸術工科大学における英語学習意欲向上の試み

英語セミナーその他のアクティブラーニングが学生に与える効果についての一考察

### AN ATTEMPT TO ENHANCE STUDENTS' APPETITE FOR ENGLISH STUDY AT KOBE DESIGN UNIVERSITY

An Inquiry about The Effects of "English Seminar" and  
Other Active Learning Methods on The Students

岡村 光浩 基礎教育センター 准教授

ラッダ 政美 基礎教育センター 教授

Mitsuhiro OKAMURA Center for Liberal Arts, Associate Professor

Masami RODDA Center for Liberal Arts, Professor

#### 要旨

本稿では、まず神戸芸術工科大学における英語科目について、2015年度に改訂された現行カリキュラム並びに2019年度導入予定の新カリキュラムについて概観した。

続いて新カリキュラム導入に先駆けて行った取り組みである「英語セミナー」「合同オリエンテーション」について、その概要を報告すると共に、学生へのアンケート結果に基づき、その実施が学生に与えた効果等について考察した。

入学直後の合同オリエンテーションで、学生たちに英語を学ぶ意義を考えさせ、様々な英語学習方法を紹介することで刺激を与えることは、学生がより能動的に学習する意欲を高めるためのアクティブラーニング志向の取り組みであり、新カリキュラム導入以後も継続していくべきとの結論を得た。

#### Summary

First, in this paper, the present curriculum revised in 2015 and the new curriculum to be introduced in 2019 are reviewed.

Then the content of "English Seminar" and "Orientation with all the English classes combined," as the attempt prior to introduction of the new curriculum, is reported. At the same time, based on the results of the questionnaire conducted to the students, the effects of those events are analyzed.

In conclusion, to have freshmen consider the significance of learning English and introduce various learning methods to them in Orientation determined if they were stimulated and motivated to study English more positively. We believe this is part of active learning and should be conducted even after the new curriculum is introduced.

はじめに

本学の英語教育について、筆者(岡村)は2007年度に本学に着任し、以後2016年まで専任唯一の英語教員として、特任教員・非常勤講師陣と共に教育に取り組んできた。岡村の就任以前から2010年度のカリキュラム改訂(～2014年度)までの変遷、並びに2007年度以降に行ってきた工夫(聴覚障害学生への対応等)、また2014年度に立ち上げられた課外英語教育プログラム「Global Cafe」については岡村の既発表論文<sup>12345</sup>を参照願いたい。

2015年度に再び英語科を含めた全学カリキュラムの改訂が行われ、また本学創立30周年を迎える2019年度に再度の改訂を実施することも決定したこともあってか、2016年度には英語教育強化のため16年ぶりに専任教員2名(ラッダ・岡村)の体制に増強された。

上記のとおり本稿執筆時(2018年7月)は新カリキュラム移行に向けての過渡期であるが、本稿では英語科としてカリキュラム改訂に先駆けて行った取り組みである英語セミナー(2017年度)・合同オリエンテーション(2018年度)について報告し、今後に向けた課題について検討したい。

なお本稿は、2-1(2017年度英語セミナーの実施報告)をラッダ、それ以外を岡村が執筆し、全体のとりまとめは岡村が行った。執筆者間の意見交換は行ったが、所見に該当する部分は担当執筆者の個人的な意見であり、神戸芸術工科大学並びに同基礎教育センターの公式見解ではない旨、念のため申し添える。

## 1 2015年度・2019年度カリキュラム改訂の概要

2010年度からのカリキュラム(以下「旧カリ」)の内容については2010年の岡村論文<sup>2</sup>1章を参照いただきたいが、2015年度からのカリキュラム(以下「現カリ」)への改訂に当たって開講科目が変更された。旧カリ「英語演習」A・B・Cに相当する内容が現カリでは「表現のための英語」と「現代英語」に再編成され、2019年度からのカリキュラム(以下「新カリ」)でも上記構成は維持される予定である<sup>6</sup>。

開講科目の概要は以下のとおり(括弧内は2018年度各

科目シラバスの「到達目標(目的含む)」の項目のうち、各科目の全担当者で共通化した部分)。

### ● 基礎英語 I・II

「基本的な単語力、読解力、文法理解力など総合的な英語能力の養成を目指すと同時に、テキストが扱う最新の情報に対する正しい理解を図り、グローバル化した現代社会のあり方について考える思考力も身につけることを目指す」。

旧カリにおける「総合英語」で、単位数は旧カリの2単位から現カリ・新カリでは1単位に変更され、また基礎英語 I は必修科目となった(IIの履修にはIの単位取得が必須)。いわゆる「4技能(読む・聞く・書く・話す)」を総合的にトレーニングする授業で、プレイスメントテスト<sup>7</sup>により初級・中級・上級の3レベルにクラス分けを行っている。

### ● 英語コミュニケーション I・II

「海外生活での具体的な場面を想定した授業で、日常生活の様々な場面における英語の語彙、表現を身につけることで、英語によるコミュニケーション運用に慣れ親しみ、即座に英語で発話・応答できる能力を育成する。また異文化への関心・理解が高まり、積極的に接するようになる」。

Iは主として(日常または旅行)英会話が中心、IIに進むとプレゼンテーションなどの要素が増す。

### ● 表現のための英語 I・II

「英語をコミュニケーションツールとして発信するプロダクトとして、CM、映画、ドラマなどのテレビ番組の映像、その他デザイン、アートの世界、文学、音楽などを教材として使用し、どのように英語が表現され、発信されているかを学ぶ。そしてこれらの方法が自分たちの作品制作や表現活動にどのように応用できるかを考える」。

本科目では担当講師の得意分野を活かした教材を使用し、2018年度は発音練習に重きを置いた視聴覚教材・映画・キャリアデザイン(アート&デザイン関係のビデオインタビュー)・時事英語(ニュース

映像)などが開講されている。

## ● 現代英語

「新形式の TOEIC テストの問題に慣れ、スコア UP のためのコツを身につける。必要に応じ、英語コミュニケーション能力の基礎となる。英単語や英文法の基礎的な知識を確認する」。

なお「基礎英語」は1年次から、その他の科目は2年次から履修可能で、全ての科目は半期開講である。

また新カリ導入に先行して2018年度から(中間/期末試験による「一発勝負型」の評価を行っていた科目/担当者を含む)英語科全科目を、授業内での小テストや課題提出の反復による平常点の蓄積で評価する方針で統一した。

## 2 2017~2018 年度の英語セミナー・合同オリエンテーションの実施

前章にも述べたとおり、2019年度新カリ導入に先行し、さまざまな取り組みを試行しているが、その一環として2017年度は前期末に英語(課外)セミナーを、また2018年度にはその延長上の取り組みとして、新年度の基礎英語初回の授業で合同オリエンテーションを実施したので、学生からの反響も含めて以下に報告する。

### 2-1 英語セミナーの実施(2017年度)

#### 2-1-1 英語セミナーの開催内容

2017年度は、基礎教育センター主催による1年生向けの英語セミナー「夏休みに英語を上達させよう」を昼休みの時間に開催した。内容を2部制にし、第1部「プレイスメントテストの結果からわかることーそしてなぜ芸工大で英語を学ぶのか?」を7月3日と4日に、第2部「夏休みに英語力を向上させよう!」を7月10日と11日の昼休み時間12:20-12:50の30分間に挙行了した。

開催場所は、7月3・4・10日は学生会館2F スチューデントラウンジ、11日は基礎教育センター1F 1104教室であった。エアコン故障により、急遽最終日の場所を変更した。

講師は岡村が務めた。第1部の内容は、プレイスメント

テストの結果から学生が英語力の弱点を知り、今後の学習課題を見出す、また芸工大で英語を学ぶ意義を考えることで、夏休み中と今後の英語学習に対する意欲付けを目的とした。

まずプレイスメントテスト結果を「基礎英語I」の授業を通じて1年生の受験者全員に配布した。学生にはセミナーにその結果を持参してもらい、結果の分析方法を学んでもらった。このセミナーに2日間で34名が参加した。

第2部には2日間で計30名が参加した。学生たちには第1部を受講し、自分たちの英語力のレベルや弱点を知った上で、次にどのようにして自らの英語力を補っていくかを考えてもらった。そして提案された夏休み中またそれ以降にもできる英語の学習法をそれぞれのレベルに応じて選択してもらった。またGlobal Cafe・情報図書館などの学内施設の活用法の他、学外でもネットを使った無料の英語学習サイトの活用法を紹介した。

#### 2-1-2 課題レポートの内容

セミナー参加者はレポートを書き、「基礎英語I」の各担当教員に提出することをオプションな課題とした。第1部に関しては以下がその課題の内容である。

1. 自分の英語力の弱点、今後の自分の英語学習の課題は何だと思いますか?
2. 芸工大で英語を学ぶ意義は何だと思いますか?
3. その他レクチャーを聞いて考えたことを書き留めておこう。

第2部のセミナーの後は、学生が各自でできる学習法を考えてレポートとして書き、同じく「基礎英語I」の担当教員に提出することをオプション課題とした。内容は以下の通りである。

1. 学内でできる英語学習法は?
2. 学外でできる英語学習法は?
3. その他レクチャーを聞いて考えたことを書き留めておこう。

オプション課題の取り扱いに関しては、学生が「基礎英語 I」の授業担当教員に提出すると何らかのボーナスポイントはその科目の評価として付与するよう、全英語教員の了解を得た。

当時は学生が Global Cafe のイベントに参加し、イベント先で配布されたクイズやレポートを履修している英語の授業担当者に提出すれば、授業評価としてのボーナスポイントが付与されるよう、全英語教員にお願いしていた。またそれらを総合して付与ポイントは全体評価の 5%以内に留めることとした。

## 2-1-3 アンケートの実施

### 2-1-3-1 アンケート内容

セミナーの参加者は、1年生の 1 割弱程度であった。その他の学生の不参加の理由、また参加者の感想も知りたく、セミナー開催後、「基礎英語 I」の授業中に担当教員の協力のもとで事後アンケート(回答者 388 名)を実施した。アンケートの内容は以下の通りである。

\* \* \*

1. あなたは 7/3 または 4 日に開催された「第 1 部 プレイスメントテストの結果からわかること」に参加しましたか? はい・いいえ

2. 1 で「はい」と答えた人へ

(1) オプション課題レポートの提出は、参加の動機付けになりましたか? はい・わからない・いいえ

(2) オプション課題レポートの提出が「基礎英語 I」の授業評価の対象にならなくても参加していましたか? はい・わからない・いいえ

3. 1 で「いいえ」と答えた人へ:

不参加の理由を教えてください。

4. あなたは 7/10 または 11 日に開催された「第 2 部 夏休みに英語力を上達させよう！」に参加しましたか?

はい・いいえ

5. 4 で「はい」と答えた人へ

(1) オプション課題レポートの提出は、参加の動機付けになりましたか? はい・わからない・いいえ

(2) オプション課題レポートの提出が「基礎英語 I」の授業評価の対象にならなくても参加していましたか? はい・わからない・いいえ

6. 4 で「いいえ」と答えた人へ: 不参加の理由を教えてください。

7. 今後、英語学習に関してどのようなイベントを希望しますか?

### 2-1-3-2 セミナー不参加の理由

まず不参加の理由として、第 1 回目については 177 人が、第 2 回目については 184 人の学生が、昼休み中に昼食(2・3 限に授業がある場合)、他の授業の課題、部活、就活、アルバイトなどの用事で忙しく、参加できなかったと答えた。

芸工大の学生は、昼休みに昼食はもとより、授業の課題もこなさなければならないようで、昼休み時間は結構忙しいことがわかった。

4 名の学生があえて「昼休みに開催して欲しくない」と記述していた。また全学科を通じて 1 年生の月・火曜日は授業が詰まっていることもわかった。月・火曜日以外の曜日を希望する学生が 3 名いた。

英語が嫌いまたは不得意なため英語セミナーに興味を持たなかったと答えた学生は、第 1 回目については 22 名、第 2 回目については 23 名いた。元々こういった英語が不得意で英語嫌いになった学生に参加してもらいたい意図があったので、自由参加には限界があるように感じた。

### 2-1-3-3 参加した学生の動機付け

オプション課題レポートの提出がセミナー参加の動機付けになっていると答えた参加者は、第 1 回目については 13 名、第 2 回目については 4 名であった。またレポー

トを提出することで「基礎英語 I」の授業評価にボーナスポイントとして付加されることがセミナー参加の動機付けになっていると答えた学生は、第 1 回目については 10 名、第 2 回目については 4 名だった。レポート提出が授業評価に付与されることはそんなに強い動機付けにはなっていないようだ。

むしろ用事等で学生全員が参加できる環境にない昼休みにセミナーを開催し、その課題レポートをある授業の成績に関与させるこの制度は、やむを得ず不参加だった学生にとっては不公平に感じるのではないかと思った。レポートが授業の成績に関係するのは嫌だと記述した学生が 1 名いた。

#### 2-1-3-4 英語学習に関して学生が希望するイベント

今後英語学習に関して希望するイベントとして、11 名が留学生との国際交流を、同じく 11 名が英会話を希望した。リスニング、単語の覚え方、文法の基礎、発音、テスト対策など英語の授業に関する学習方法の補助的な個別相談を希望する学生が 15 名いた。12 名の学生が英語の映画やドラマ、歌などを取り上げて欲しいという希望していた。

#### 2-1-4 2018 年度の「英語セミナー」に向けて

2017 年度の「英語セミナー」に参加した学生たちのレポートから、1 年生にとっての「英語セミナー」開催の意義と重要性が確認されたので、2018 年度もほぼ同じ内容で開催することにした。しかし 2017 年度開催の英語セミナーについてのアンケートの結果から、「英語セミナー」を昼休みに開催すること、また自由参加にすることに限界があると感じた。

そこで 2018 年度の「英語セミナー」を、「基礎英語 I」の授業の第 1 日目に同じ時間帯の全クラス合同で開催することにした。そうすることで、前回の不参加の理由を解消でき、英語の好き嫌いに関わらず全員にセミナーを受講させることができる。

#### 2-1-5 今後の英語学習に関するイベントについて

留学生との交流会は国際交流課と連携し、英語の授業を通じて希望者を募ることができる。また交流会の企画にも海外留学の経験のある英語教員が関わることで内容も深まるのではないかと思う。

英会話や英語学習に関する個別指導や相談は、Global Cafe で可能だということを学生たちにもっと広く知らせる必要があると感じた。2017 年度は、英語教員がイベントの企画や広報に関わることで、前年度と比べて前期だけで 64 名の参加者の増加を達成した。これからも英語教員が国際交流課や Global Cafe などの機関と連携することで、授業を通じて観察できた英語学習に関する学生の必要性を分析し、それらをイベントの企画に反映していければと思っている。また開催についても英語の授業を通じて学生への広報活動を手伝っていきたい。

#### 2-2 合同オリエンテーションの実施 (2018 年度)

##### 2-2-1 合同オリエンテーションの実施概要

2017 年度英語セミナーの実施経験を踏まえて、2018 年度は基礎英語 I を受講する 1 年生全員にオリエンテーションを行うべく、授業の初回を合同オリエンテーションに充てることとした。当該科目は月・火曜日の 1・2 時限に集中して開講されているので、授業初日(4 月 10 日・16 日)の同一時間帯に開講されている 4~5 クラスを 1225 教室に集め、冒頭 60 分弱で全体ガイダンスを岡村が実施し、その後各教室に移動して残りの 30 分弱で担当講師との顔合わせとクラス別のガイダンスを行うこととした。内容は概ね 2017 年度の英語セミナー第 1 部・第 2 部の内容を合わせたものに、(当該ガイダンスが「大学で初めて受ける授業」になる学生も多いことから)初年次教育的な内容も加えたもので、講師陣紹介のほか主な項目は以下の通り：

- 芸工大で英語(外国語)を学ぶ意味<sup>8</sup>
  - アーティストが言葉を大事にする必要性
  - 大学での英語の授業の意味～何をなすべきか?
- シラバスの解説と補足説明
  - 神戸芸術工科大学の英語科目(概要)
  - 基礎英語 I (1 年次必修科目)について

- ◇ 使用テキスト・参考テキスト
- ◇ 履修上の注意事項
- Global Cafe の紹介
- プレイメントテストの結果について
  - 総評
  - スコアレポートの見方
  - 他の英語資格との関係
  - TOEIC 型のテストについて
  - ◇ 取り組み方のヒント

2-2-2 アンケートの実施

今年度は前年度と異なり授業時間内に合同オリエンテーションを実施したので、原則として基礎英語 I を履修する全学生が出席したが、次年度以降の判断材料として、今回も各担当教員の協力を得てアンケートを実施した。

回答（提出者 360 名）は以下の通り：

1. 合同オリエンテーションは、役に立ったと思いますか？(1つ選ぶ)
  - ①とても役に立った 76
  - ②少し役に立った 135
  - ③普通 149
  - ④あまり役に立たなかった 9
  - ⑤全く役に立たなかった 0
2. 合同オリエンテーションが役に立ったと思う点を挙げてください。（当てはまるものすべてに○を付けて下さい）
  - ①芸工大で英語を勉強することの意味が分かった・考えさせられた 164
  - ②クリエイターが(英語に限らず)言葉を大事にする必要性が分かった・考えさせられた 185
  - ③芸工大で履修する英語科目の全体像がわかった 102
  - ④基礎英語の授業で学習する内容がわかった 92
  - ⑤プレイメントテスト結果で自分の英語力がどの位か分かった 85
  - ⑥Global Cafe の存在と活動・参加するメリットについて知った 73

- ⑦(英語に限らず) 大学で勉強することの意味について分かった・考えさせられた 76
- ⑧(英語に限らず) 大学での勉強の仕方のヒントを得られた 50
3. 講師(岡村)の話はどうでしたか(それぞれ1つずつ選ぶ)
  - 3-1 ①とても聞き取りやすかった 84
  - ②聞き取りやすかった 151
  - ③普通 117
  - ④聞き取りにくかった 5
  - ⑤とても聞き取りにくかった 1
  - 3-2 ①とても面白かった 40
  - ②面白かった 88
  - ③普通 188
  - ④つまらなかった 6
  - ⑤とてもつまらなかった 1
4. 合同オリエンテーションを聞いて、英語を勉強しよう・しなければと思いましたか？(1つ選ぶ)
  - ①強く思った 94
  - ②多少は思った 255
  - ③全く思わなかった 10

また自由記述として

- ①合同オリエンテーションを受けてみた感想
- ②その後英語の授業を受けてみての感想
- ③その他思ったことを自由に書いて下さい。

について回答を求めた。類似の内容が複数あったものを集約(「特になし」「普通」を除く)すると：

- (予習・復習・自習を) 頑張りたい 81
- 楽しんで学ぼう(学んでいる)と思う 34
- (説明・授業が) 分かりやすかった 33
- 英語の大切さ(必要性・重要性)が分かった 26
- (英語を学ぶ) 理由が分かった 17
- 将来に向け英語は必要だと思った 17
- 大学での英語の学習について理解した 11

- 心の準備ができた 8
- Global Cafe に行ってみた(行ってみた) 7
- プレイスメントが悪かった・難しい(難しそう) 5

等の感想が寄せられた。

### 3 英語セミナー並びに合同オリエンテーションの実施結果についての考察

以上、英語セミナー並びに合同オリエンテーションの実施概要並びに学生の反応をまとめたが、1年目の英語セミナーの経験を活かし、入学直後に実施した合同オリエンテーションにおいて、「なぜ芸工大に来てまで(!)英語を学ぶのか?」(岡村実施のスライドより)につき新入生に共通認識を持たせ、また受講姿勢を引き締めることについて、一定の効果を上げることはできたと判断でき、意義あるものとなったとすることができるであろう。

担当講師陣同席の下「合同」で、専任教員(2018年度は岡村)が(授業時間帯毎に同一内容で複数回)オリエンテーションを行うことについて、自由記述で1票だけしかなかった学生の感想の中には「合同で行う意味があまり感じられなかった。クラス毎でよかったのではないか」との意見もあった。確かに全体オリエンテーション終了後にクラス毎の担当講師との顔合わせのため教室を移動するのは時間と手間を必要とするやり方である。

しかしこの方式には受講する新入生だけでなく、共通シラバスで基礎英語の授業を担当するが、バックグラウンドが異なる担当講師陣(専任教員・特任教員・非常勤講師)の間で認識・姿勢を改めて共有できる効果もある。

特に授業時間が完全に重なっていることもあり授業期間中にまとまった打ち合わせの時間がなかなか取れず、かといって打ち合わせのためだけに別の曜日・時間に出校していただく訳にもいかない非常勤講師の方々にも、授業方針等共通化が必要な部分につき専任教員側の認識を直接共有していただくことは重要である。

以上の理由により、本年度に試行する形となった基礎英語授業初回の合同オリエンテーションについては、2019年度の新カリ導入以後も継続していくことが望ましいと

考える。

大学教育のカリキュラム改革における焦点のひとつとなっているアクティブラーニングについて、2012(平成24)年の中央教育審議会答申は

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である<sup>9</sup>。

またアクティブラーニング研究の第一人者とされる溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター)は

一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う<sup>10</sup>。

と定義している。

アウトプットを伴う外国語学習は必然的にアクティブラーニングではあるのだが、中間/学期末試験による「一発勝負型」の評価を「平常点重視」に移行すること(1章)や、入学直後の合同オリエンテーションで学生に刺激を与えること(2章)もまた、授業の内外を問わず、学生がより能動的に学習する意欲を高めるための、アクティブラーニング志向の取り組みであると言えよう。

おわりに

今年度は現行(2015~)カリキュラムの完成年度であり、続く2019年度には新カリキュラムが導入されるが、2020年度には全国レベルの大学入試改革として、記述式も採り入れ現行の大学入試センター試験に替わるとされる「大学入学共通テスト」が開始される予定で<sup>11</sup>、特に英語試験のあり方については大学英語教員を中心に英語教育関係者の中で議論になっている<sup>12</sup>。

本稿で上記について論ずることは論文の主旨を外れるが、現状でもどちらかという英語に「苦手」意識を持って入学してくる学生の方が多環境の本学において、「アート&デザインの総合大学における基礎教育科目の英語」として、何を・どこまで・どのように教えるべきか(教えられるか)という問題は、上記英語教育改革・英語入試改革に係る議論の行方の如何に関わらず、常に突きつけられ続ける問題である。

本稿で報告した英語セミナー並びに全体オリエンテーションの実施経験と学生からの反響・希望を基に、学生の能動的な学習意欲を刺激する授業並びに課外教育活動のあり方について、学内外での議論と試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいきたいと考える。本稿並びに今後の展開に引き続きご意見を賜れば幸いです。

最後に、本稿に報告した諸活動を含め、日頃から筆者両名に快く応じてくださる関係各位に対し、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

注 (URL については 2018 年 7 月 30 日に最終閲覧)

- 1) 岡村光浩、「神戸芸術工科大学における英語教育についてー現状と展望ー」、『芸術工学 2009 (神戸芸術工科大学紀要)』、2010 年、  
<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>
- 2) 岡村光浩、「初年次教育・基礎教育についての一考察／神戸芸術工科大学における英語教育を中心に」、『芸術工学 2010 (神戸芸術工科大学紀要)』、2010 年、  
<http://id.nii.ac.jp/1100/00000059/>
- 3) 岡村光浩、「リメディアル教育・学生支援の視点を取り入れた基礎教育についての一考察／神戸芸術工科大学における英語教育を中心に」、『芸術工学 2011 (神戸芸術工科大学紀要)』、2011 年、  
<http://id.nii.ac.jp/1100/00000035/>
- 4) 岡村光浩、「聴覚障害学生に配慮した英語授業の試みー神戸芸術工科大学における情報支援の経験を中心に」、『KELT (神戸英語教育学会紀要)』、28 号、2013 年、pp. 31-51
- 5) 岡村光浩、「小規模大学における課外英語教育プログラム導入の試みー大学「英語村」等先行事例の視察報告と KDU Global Cafe 立ち上げを中心に」、『KELT (神戸英語教育学会紀要)』、30 号、2015 年、pp. 63-84
- 6) なお卒業要件としては、旧カリ基礎分野科目の「リテラシー (語学)」区分として、英語各科目+フランス語・ハンデル・中国語・日本語 (留学生向け) それぞれ初級 I・II/中級 I・II と日本語文章作成の科目群から 8 単位

以上取得から、現カリ基礎教育科目の「コミュニケーション」区分として英語各科目+中国語・フランス語・ハンデル・ドイツ語の I・II (初級・中級の区分は廃止)・日本語 (留学生向け) 初級 I・II/中級 I・II と日本語表現・文章表現法それぞれ I・II の科目群から 7 単位以上取得に変更されており、さらに新カリでは「学修基礎」区分に移した日本語表現・文章表現法を除く上記科目群から 5 単位以上取得に変更される予定である。

7) 英語運用能力評価協会 (ELPA) の「英語プレースメントテスト」を使用。 <http://npo-elpa.org/placement/>  
8) この部分については、2009 年度に新入生向け「スタディスキルズ」の一環として行った小講義 (その後履修内容の増加に伴い、英語については除外されて現在に至る) と内容の多くが共通しているため、前掲注 1 岡村論文の以下を参照されたい。

<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-02.html>

9) 中央教育審議会、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」、2012 年、

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf) p.37  
10) 溝上慎一、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』、東信堂、2014 年、p.7

11) 大学入試センター、「大学入学共通テスト (新テスト) について」、

[http://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka\\_test/](http://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/)

12) 英語入試改革については、「試験の民間委託」と「スピーキング試験導入」が志向されていることから、大学入試に必要不可欠な公平性・公正性の観点からの疑問・懸念・異議や、その背景にある「4 技能推進論」の妥当性への疑問も少なくないが、

賛成・推進派の意見として、文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」

( [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/) )委員でもあった

安河内哲也『全解説 英語革命 2020』、文藝春秋、2018 年、

反対・批判派の意見として、南風原朝和編著、『検証 迷走する英語入試ースピーキング導入と民間委託』、岩波書店 (岩波ブックレット)、2018 年、

阿部公彦、『史上最悪の英語政策ーウソだらけの「4 技能」看板』、ひつじ書房、2017 年を参照。